

第 22 章 窓辺の人

迅速で効率的な仕事を確実にする最良の方法は、新しい技師長を雇うことである。

ニューヨークのスター新聞

誰が決定したかについては誰も発言せず、そのことが、ニューヨーク側の理事達、特に市長を大変苛立たせていた。彼らは「ニューヨーク市が、橋梁を渡る寝台車と貨物列車から利益を得ることは不可能であり、誰の権限で、その技術者の計画が、そのような交通体系に適合するように、突然にそれも密かに変更されたのかを知りたい」と発言した。しかし、もう一方の理事達は、はっきりした回答をしなかった。理事会室の緊張感が高まっていき、そこですぐ、ジェームズ・ストラナハン（図-22.1¹⁾）は、ウィリアム・R・グレイス市長（図-22.2²⁾）に「実施された全ての件に関する権限は、当然あります……。どんな形であれ、その件には個人的な考えや私情は入っていません。そして、それが秘密裏にとか、理事会の一員としての合法的な職務から外れた方法で行なわれたと、疑われるようなことは、全く行われていないと、私は断言します」と説明した。



図-22.1 ジェームズ・ストラナハン (1808~1898)



図-22.2 ウィリアム・R・グレイス (1832~1904)

ストラナハンは、明らかに怒りながら滅多にしない答弁を行っていた。彼の通常の進め方は、反対者がおそらく半分程正しく、もちろん善意から反対していると考えたことであつたが、それにしても全体から見て、彼の最初からの前提が全く間違っていたようであつた。彼は、いつも反対者の“より成熟した判断”を頼りにする意志があり、その判断を熟成させる状況を作り出すために、たいてい遅延を認める意志あつた。しかし、直接的な質問を遅延させることは簡単ではなかつた。だから、いつもは人当りの良いストラナハン、人々に英国の政治家を彷彿させるような人物で、その時点で70歳代となり、これまでより更に威厳があるように見られていた彼が、その立場、いわば個人的な性格の素晴らしさとこれまでの貢献度を背景にして、ものすごい義憤の表情を示していた。

その駆け引きはうまくいった。グレイス市長は自分に悪意はないと言い、それ以上の質問はしなかつた。ストラナハン「ニューヨーク側理事の方々が懸念されているような事情は、本当にありません」と発言した。彼は、理事達に、自分が10年前にコーネリウス・バンダービルト³⁾と

¹⁾ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:James_S._T._Stranahan.png (参照日 2016-07-31)

²⁾ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:William_Russell_Grace.jpg (参照日 2016-07-31)

³⁾ コーネリアス・バンダービルト (1794~1877年) は、アメリカの海運業と鉄道業で財を成した実業家で、ニューヨーク・セントラル鉄道やニッケル・プレート鉄道を支配下に置き、“鉄道王”と呼ばれた。

ニューヨーク中央鉄道の乗り入れについて、どのように話し合ったのか、また、ローブリング大佐が、バンダービルトの技術者に会って、その対応方法をどのように解決したのかを話した。一段低いところにある鉄道を、グランド・セントラル駅の南側から橋梁まで走行させることが可能かどうか、橋梁を渡らせるために、列車を油圧リフトで上昇させることが可能かどうかについて、検討が行われていた。ストラナハンは「つまり、ブルックリンが自分達の駅を要望することは、それほど不自然なことでしょうか？」と尋ねた。彼は「至る所で起きていることについて、考えていただきたい。・・・すでに、西部に向かう 3 本の幹線鉄道が、ジャージーまで来ており、さらにもう数本が 12 ヶ月以内に完成する予定です。ニューヨークでは、西に向かう唯一の幹線鉄道が、ニューヨーク・セントラル鉄道です。ニュージャージーは、乗客のためにアネックス船を派遣し、そして、舢（はしけ）はニューヨークの岸を通り越して貨物輸送を行っている。そのことが、ニューヨークの皆さんにどのような利点があるというのですか？ すぐに、あるいはもう少し後で、皆さん方はこの問題を検討することになるでしょう。その時になって、私達が自らの利益だけでなく、ニューヨーク市の利益にとっても、無駄な努力をしていたわけではないことを、きっと理解して頂けると確信しています」と説得した。

その後、ローブリング夫人が、この時刻までにブルックリン主塔に上がり、橋を歩いて渡る用意をして待っていることに気づき、会議は一時中断となり、質問が残ったままとなった。

状況が判明したので、公式な回答な行われることはなかった。変更決定の責任者は匿名のままとすることが選択され、変更に関する説明を任された人物は、ローブリングであった。

その問題は、建設事業が終盤に近い時期ではなかったこともあり、橋梁のこれまでに増加した事業費について、新聞でほとんど話題にならなかった時期でもあり、その変更は、おそらく大した問題ではなかったのかもしれない。しかし、1881 年 10 月、ローブリングが、重たい蒸気機関車と車輛の走行に対して十分な床組剛性を確保するために、トラス構造に付加する 1000 トンの鋼材の要請を提出した時、数人の理事は、彼らが待ち望んでいた時が訪れたと考えた。

彼らは、なぜか急に橋梁の強度に関する問題を知ろうとした。誰が、鉄道列車の乗り入れを決定したのか？ どのようにして、そのようなとても重要な決定が行われたのか、なぜこれに関する説明が記録に残っていないのか？ そして、いつものように言外に「技師長は、自分が何をしているのかを、分かっているのか？」という更に大きな疑いを含めていた。

主たる問題は、誰もが事業の完成を目にすることを極めて心配しており、最終的に全体的な事業費が一体いくらになるかを、正確に知りたいと強く願っていることであった。

1882 年、年初めの時点で、橋梁に対する全支出は 13,377,055.67 ドルとなる予定であった。しかし、数人の論説者がいつも書いていたように、当初の見積は、およそその半分であった。ヘンリー・マーフィーは、完成までにあと 60 万ドルあれば十分であると思うと発言していたが、彼でさえ、その金額に固執する気はなかったようである。ツィードが関係した裁判所建設の古い記憶が、

理事会の誠実な人々を悩ますように蘇り、今や橋梁の建設費用は、裁判所建設で注ぎ込まれた費用⁴を上回ろうとしていた。

そのうえ、理事会の中でも少数の理事だけが、橋梁の技術やその歴史的背景をしっかりと理解していただけており、依然として、技師長と個人的な付き合いをしている人は、ほとんどいなかった。実際に、その時点で、その巨大事業の運営責任を負っている人々の半数以上は、ワシントン・ローブリングに会ったことさえなかった。そして、彼との情報交換が書簡以外の方法がなく、それを望むものは滅多におらず、そのような人は、情報交換を行っている人々にとって厄介者であり、そのことが時々誤解を招いていた。

理事の中で最も歯に衣させぬ人物であったロバート・ルーズベルト (図-22.3⁵) は、10月13日の理事会で、追加鋼材による重量増加で橋梁が弱められるのではないかと、馬鹿げた主張をした。ケーブルがどの程度の重量を支持できるのかを、正確に知りたいと要請した。彼は、ローブリングが早急に報告書にまとめて提出するよう要望した。彼の動議は採択され、ローブリングは指示されたように、1882年1月9日付けの手紙で説明を行っている。そこには、追加した重量は床の剛性を高める意味があり、橋梁を弱めるのではなく、なお一層強固になるという説明が記載されていた。ローブリングは、誰が彼の計画を修正するように指示したのかを発言することではなく、そうすることが、



図-22.3 ロバート・ルーズベルト
(1829~1906)

が、彼に“義務として課される”ようになったとだけ述べていた。ローブリングは、理事達も知っていたように、橋梁上に従来型の列車を走らせる考えには反対していたが、その指示に従った。ローブリングは「私が、この変更を行うことに同意したとき、個人的な懇願に従った訳ではなく、むしろ構造物自体が役に立ちそうなあらゆる可能性のある目的に、それを使用しない限り、途方もない出費をして、この橋梁を建設してきたことに、どのような利点があるのかを熟考したからである」と述べている。今回の変更によって、橋梁の剛性が非常に向上し、通常の交通が橋梁上に載っても、目に見えるような影響が無いほど丈夫になった。そして、誰もが心配しているケーブルへの懸念を鎮めるために、ケーブルがアンカレッジを引き抜けるくらい十分に強いことを、かなり劇的に述べて結論とした。

橋梁用列車をケーブルで牽引する当初計画は、断念されることはなかった。それは、まさに橋梁がその時点で将来に適応する十分な強度を備えたことであり、その将来については、何がしかの鉄道を含むものであろうと、全く自然に推定された。しかし、その推定は間違っており、別の要因、主として内燃エンジンと自動車の出現については、その時点で、誰も思いつかなかったかもしれない。その決定は、正しかったと判明することになる。その結果、橋梁は、上部構造になんら主要な改造を必要とせず、その後50年間そのまま供用されることになる。

⁴ 裁判所建設の建設費は、当初25万ドルであったが、ツイード・リングが関わり、最終的に1300万ドルを超えてしまった(第6章参照)。

⁵ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Robert_Roosevelt_-_Brady-Handy.jpg (参照日 2016-08-03)

言い換えれば、それは、とても重要で幸運な決定であった。そして、後に言われた幾つかの状況から、それを行った人物の一人がストラナハンであり、キングズレーやマーフィー、最終的には彼を支援していたローブリングと一緒にいったようである。おそらく、ストラナハンは年をとったバンダービルト代将⁶と“相互理解”に達したのであろう。なお、この時点で、バンダービルトは亡くなっていたが、依然として、ニューヨーク・セントラル鉄道は、その構想を本気にしていた。おそらく、ストラナハンとその関係者は、その決定が長い目で見てブルックリンの利益になると、簡単に考えたのであろう。結局、橋梁は強すぎるということはなく、また、その状況乗り越える騒々しい論争、確実に失うかもしれない論争の危険性よりむしろ、彼らは、まさに先行実施を選んだのであった。

その決定がブルックリン内部で行われたのは、確実であり、説明がどうであれ、彼らは強気になっていた。発注済の鋼材の納入は、予定よりかなり遅れており、いかなる追加した鋼材も、更に経費が嵩むだけでなく、更なる遅れを生じそうであった。そのため、発表された計画変更の当面の結末は、事業のこのような最終段階における処置を誤った人物を見つけ出す騒ぎとなった。

皮肉なことに、橋梁はほとんど建設されていた。難しく骨の折れる作業は、確かに施工済であった。その時点で、ほとんどが仕上げ段階であった。すなわち、取り付け道路の最終的な石積工、トラス構造の最終部分、道路と遊歩道の床板の施工、そして、多くの塗装作業が残っていただけであった。すでに、作業員達は、キャットウォークを撤去し始めていた。

ローブリングは、1869年の夏に父親が亡くなって以来初めて、少しだけくつろぐことができた。13年間で初めて、彼の働きは、もはや絶対不可欠なものではなくなった。初めて、彼を本当に必要としなくなった。


ローブリングと同様に、当初から事業に関わっていた理事達も、全員が13歳年を取っていた。ヘンリー・マーフィーのように、何人かは、年を感じさせるようになっていた。しかし、遂に事業の完成がほぼ手の届く範囲になった時点で、事業の遅れに、最も苛立ち、最も欲求不満となっていたのは、理事会の新顔の連中であった。前述したように、ロバート・ルーズベルトは最も大きく騒ぎ、彼の質問に誰もまともに答えていないことを根拠として主張していた。しかし、彼にも、大切な新しい協力者として、ブルックリンの大変若い共和党の新任の市長であるセス・ロー（-22.4⁷）がいた。



図-22.4 セス・ロー
(1850~1915)

⁶ 代将 (Commodore) とは、アメリカ海軍の最高位を示す称号であるが、1830年代にバンダービルトがその称号で呼ばれるようになると、『代将』はその後蒸気船企業家を表す一般的な言葉となった。

⁷ <http://cdn.brooklynheightsblog.com/wp-content/uploads/Seth-Low-II.jpg> (参照日 2016-08-02)

セス・ローは、1882 年 1 月に出席した初めての理事会で、ほとんど発言することはなかった。彼は少年のような顔に、用心深そうな深刻な表情をして、ただ座って聞いていただけであった。ただ終わり頃に、彼は、橋梁が完成する時期をヘンリー・マーフィーに尋ねた。

マーフィーは尋ねられるとすぐに、その質問に答えた。資金に関してこれ以上の複雑な事態がなければ、橋梁は、秋には完成するだろうと発言した。

32 歳のセス・ローは、ヘンリー・マーフィーの孫と同じくらいの若さであったが、マーフィーがブルックリン市長に選出された時ほど若くはなかった。ローは、A・A・ローという裕福な絹商人の息子で、父親の高速帆船がかつてブルックリン埠頭に沿って並んでいた。ローは、コロンビア大学のローブリングの自宅から通りを下った大邸宅で、“何不自由なく”育った人物であった。おそらく、ヘンリー・マーフィーは、青年の中に、彼自身と共通する何かを見つけたのであろう。何ら質問せずに、彼は、ローが歩んできた経歴を理解していた。

マーフィーと同様に、コロンビア大学でのローは、とても優秀であった。理事長バーナードは、彼のことを「大学で最初の学者であり、ここにいる様々な学生のなかで、最も勇ましい若い仲間」と呼んでいた。その後、彼は父親の絹事業を引き継ぎ、合衆国最高裁判所の裁判官の娘と結婚し、ブルックリンに青年共和党クラブを組織して、ガーフィールドとアーサーの選挙支援を行った。そこには、政治クラブとして、喫煙室・ビリヤード部屋・酒場・社交場等を設置せず、一生懸命働く以外の何もないという全く新しい試みを進めていた。

セス・ローが市長選に“市民の候補者”として立候補した時、最優先の論点は、ブルックリンの地方自治であった。彼の十分に洗練され、かなり磨かれた魅力的な風貌と、年齢の“若さ”が彼を引き立てていた。政治家達は、彼のことを全く気にならなかったが、市民は、はっきりと応えた。彼は、首領マクラフリンが立てた候補者を完全に打ち破り、4 千票差で過半数を獲得し、自らの資金を使わずに当選した。州外の新聞では、すでに彼のことを国家の重要人物と呼んでおり、彼は、やがて州知事になるという話があった。

だが春になっても、橋梁の完成は少し近づいたようには見えず、マーフィーの確約も、もはや頼りにならなくなった。そこで、ローは、A・C・バーンズとニューヨーク側の理事（グレイス市長、ルーズベルト、ニューヨークの会計監査官キャンベル）と、新聞の見出しのように「厩舎をきれいにする」として手を組んだ。当時、若い理事全員が橋梁の完成を非常に急いでおり、新聞や市民は、それを大変歓迎していたようであった。

ローは、6 月 12 日に彼の最初の行動を起こした。彼は、技師長に対して、完了作業に関する定期的な月次報告書の提出を義務づけること、その報告書には、橋梁の完成時期についての見解を含めることを、要請した。その次に、技師長に“橋梁に関連する問題について相談する”ために、

2 週後の特別会議で、理事達の前に本人自らが出向くことを要請する動議を提案した。

しかし、まさにその直後、ロバート・ルーズベルトは、お手上げだと諦めて、たいへん立腹しながら辞任を発表した。彼の目的が、理事会内で高まっている敵対意識に、ある程度の注意を引き付けることであれば、成功した。ルーズベルトは、ウィリアム・グレイス市長に宛てた長文の公開質問状で「橋梁の問題は、リーダーシップの欠如である」と明言した。実直な理事は、何らきちんとした回答を得ることはできなかった。彼は「橋梁の運営管理が、死そのものでさえ遮ることができないような堅固な集団に牛耳られている。鋼材の納入遅れは恥ずべきことであり、運営管理において、常に技師長が在席し、単に作業を監督するのではなく、理事達が明確な情報を必要とする時には、いつでも面会するような体制となっていないことは、間違いない」と発言した。

新聞は、ルーズベルトが発言する必要があることを重視した。ヘンリー・マーフィーは、その話題の別の面を説明するために、直ちに記者を呼んだ。初老の弁護士は「ルーズベルトが橋梁の問題についてよく分からないと感じているとすれば、それは、彼の理事就任以降に開催された会議に、彼が半分ほども参加していないからかもしれない。また、彼は、技術面での質問に答えるアシスタント技術者がいるにもかかわらず、これまでに一度もそのような質問をしたことはなかった。ローブリングに関していえば、彼の役割は、どのような技術者 20 人をもってしても、代替できるものではない」と発言した。

その時にマーフィーと同席していたジョン・T・アグニューという別の理事は、ローブリングの意識がこれまで同様に明晰なものであることを、強調するために口をはさんだ。アグニューは「ローブリングは自宅の窓から、橋梁上で進行している全ての状況を見ることができる。もちろん望遠鏡を使って、働いているそれぞれの作業員の顔つきまで識別することさえできる。彼は、計画と凶面の全てに関与しており、最初にそれを彼に提出するまで、作業は何も実施できない。彼は、皆さんや私のように街路を歩き回ることはできないが、部屋の中を動き回り、時には外に出ることもできる。彼は、後日の理事会の会議には、出席すると約束している」と発言した。

ローブリングは、そのような約束をしていなかった。彼が、多少良くなったというのは本当であった。特に視力は、かなり回復していた。彼は、再び書けるようになっており、まさにかろうじて判読できるほどで、子供のようにひどい筆跡だったものの書けるようになっていた。また、この頃には、幾度か外出したこともあった。しかし、その正確さは別として、アグニューの発言は、状況に全く違う光を当てた。

またこの時までには、セス・ローは、エッジ・ムーア製鉄会社の契約通りの納入不履行に関する調査委員会の委員長を、引き受けた。会社の社長は、事情を説明するためにローの委員会に出席し、不履行の原因がエッジ・ムーア社ではなく、ペンシルバニアのジョンズタウンにあるカンブリア製鉄会社にあると説明した。その会社は、エッジ・ムーア社が、橋梁のアイバーや他の部材を圧延するための鉄鋼塊の供給元であった。新聞の編集者を大喜びさせるかのように、エッジ・

ムーア社の社長の名前はセラーといい、マーク・トウェインの『金ピカ時代』の主人公と同じ名前であり、その小説はニューヨークで大人気の劇となっていた。新聞は、すぐにこれを喜んで取り上げ、問題のセラーがペンシルバニアの紳士であり、もちろんトウェインの主人公である貯蓄高が数 100 万ドルもある南部の興行主ではないことを、皮肉っぽく強調した。

セラーとの契約は、6 月 26 日に予定されている特別会議で、技師長出席のもとで取り上げる論点であった。しかし、指定された時間となり、全ての関係者が参集した時間になっても、技師長は現れなかった。それだけでなく、記者とほとんどの理事が突然初めて知らされ、大変驚いたことは、技師長が、もはやブルックリンにさえいなかったことであった。彼は、ロード島のニューポートにいた。

その朝に届けられた電報で、ローブリングは「本日、理事の皆さんとは、お会いできません」とだけ書いており、ヘンリー・マーフィーは、その電報を全員が着席すると直ちに読み上げた。

会議は予定通りに続けられたが、その前に、ローブリングの欠席の仕方については、相当に厳しいことが言われた。スローカムは「ローブリングは、理事会に雇用されている立場であり、従って理事会から指示された時には、その前に姿を見せるべきであり、少なくとも釈明の書簡を送ることは、できたはずである」と辛辣に述べた。ロー市長は「ローブリングは、あっさりと出席した方が、よほど良かったのではないかと不気味な口調で批評した。

その時には、少なからぬ人々が、とても狼狽していた。

ニューヨークのサン新聞は「あのようなそっけない無関心さを表すような連絡を送ることは、どんな病気の理由があっても、許されることではない……。巨大な公共事業に従事している間に、深刻な身体的障害を受けた優秀な技術者に、同情することは当然なことである。だが、彼は、不作法で決して礼儀正しいとはいえない態度を示しても、許してもらえるような寛大な気持ちを、当てにしてはならない」と書いている。公共心のあるセス・ローも、その問題への印象に関して、何の疑問も持たなかった。彼は、機会のあるごとにローブリングを非難し、橋梁が“見かけばかりの夢の構造物”にすぎないと、悪口を言っていた。

ありとあらゆる興味をそそる話が、広まって行った。ローブリングは、自分の意思に反してニューポートへ船出をしており、彼自身は隠れるつもりは全く無かったが、ストラナハンとマーフィー、キングズレーは、他の人々が彼にあえて質問しないようにしたと言われていた。ローブリングが、当初の契約を知りすぎていたと言われていた。彼は、その話を最初から最後まで語ることができる唯一の人物であった。

別の噂として、ローブリングがこの時までに絶望的な麻痺状態に陥ったという話や、間違いなく理事達がこのことを知られたくなかったとの話もあった。彼が全く心の制御ができなくなったとか、ものすごく気違いじみてしまったとか、“本当は死んで”しまったとか、彼の妻が誰も知ら

ないうちに全てのことを決定し、何か月も全体の工事を指揮している等と言われた。すぐに、ほとんどの新聞が同じようなことを書いていた。

再度、ローブリングは、理事会に出向くよう要請を受けたが、その日が来ても出向くことはなかった。しかしながら、今度は説明用の書面を送った。出席するには、病気が重すぎるとのことであった。彼は、せいぜい数分間だけなら話すことができたが、会話が長く続く場合は聞きとることができなかった。彼は主治医達の勧めでニューポートに行っており、「医者達から、少しは戸外に出て、都会の喧騒から離れることで、“私の顔や頭の神経過敏の症状”が少し治まるかもしれないと期待されている」と説明した。彼は、その頃には時折、部屋の外に出られるようになっていた。

彼が前回の会議の欠席について説明しなかったのは、彼が病気であることを誰も当然知っていると思ったからであり、理事達が新聞に取り上げられた彼の健康状態の記事を、うんざりするほど読んでいないと、考えたからであった。

彼が橋梁に関して、何の仕事も行わなかったような時は、一日とてなかった。彼のアシスタント技術者達は、いつでも彼に助言を求めることができた。その夏に実施すべき工事は“とても単調な決まり切った作業”であった。請負者のセラーが、必要に応じて迅速に鋼材を供給すれば、工事は全く遅れることなく進むはずであった。

しかしその一方では、ローブリングはヘンリー・マーフィー宛てに、セラーの鋼材供給を早めることができなかつたと手紙を書いた。ローブリングは「要求した様々な形状の鋼材を圧延することは難しい仕事であり、それに加えて、セラーは、その契約で利益が出ていないので、その仕事を特に大急ぎで進めている訳ではない。必要なあらゆる鋼材が手元があれば、上部構造は3ヵ月で完成させることができたであろう。実際に、マーフィーが予想しているような橋梁を年内に完成させることは無理であろう。より現実的な日付としては、1883年まで遅れることになるであろう」と力説した。依然として技師長を信頼しているマーフィーや理事会の他の人々にとって、この遅れは、とても落胆させる知らせであった。

7月初旬、ブルックリンのイーグル新聞は「ニューポートは、今が一番魅力的に見える。既に大変多くの夏の居住者が到着している。商業関係者は、今後の見通しに満足しているようであり、ホテルの所有者は、長い間待ち続けた大賑わいの季節を期待している」と報じている。国立英国テニス協会は、カッシーノの支配人達の招待で、そこでトーナメントを開催することになっていた。そして同じく屋外スポーツの予定には、クイーンズ州狩猟大会、ヨットや射撃、競馬の試合も組み込まれていた。

確かにニューポートは、そのような評判の場所であり、ワシントン・A・ローブリング大佐が

夏の間に「マイヤー・コテージ」を借りたと報道された時、人々は、彼が過ごしているそんな暮らしを想像したのは、当然のことであった。

しかしながら、その想像は明らかに間違っていた。エミリーが借りた家は、ニューポートで有名であった「コテージ」の類ではなかった。その住宅は、大きくて快適であったが、「もう一方のニューポート」として知られた場所にあり、昔の港町のとても古くて流行遅れの区域にあり、ワシントン通の終端付近の外れにあった。ワシントン通は、湾の沿岸に平行に走っており、その当時のニューポートの案内には、「日陰で、静かで文学的な性格の人々に好まれる保養地」と解説されていた。その住宅は、彼らの要望にとっても合っていた。湾からの風は心地よく、騒音や気が散るようなことはほとんどなく、プライバシーは十分であった。幅広い表側のベランダと、二階の表側の寝室からは、水辺の広々とした眺めと、ニューポート港の灯台が眺められた。とても重要なことは、その住宅が、ゆるやかで平らな場所で、ニューヨークの蒸気船の埠頭から馬車で 10 分程の場所にあり、船からローブリングを上陸させるのに、できる限り簡単で、痛みを少なくできる点であった。

ニューポートのヨット場やテニス会場、園遊会の場所は、数マイル離れており、見えないだけでなく、二人がその夏に過ごした場所とは全く異なる別世界であった。そこは、それまでブルックリンで過ごしてきたように、精神的にも全く離れた場所であった。

二人がニューポートを選んだのは、その当時、G・K・ウォーレンがそこに配属されていたからであった。彼は、ニューイングランドの工兵隊活動の全般を任されており、その時の主要任務は、ブロック島の防波堤建設であった。エミリーの兄の健康状態が、この時までどの程度悪化していたかを、彼女が認識していたかどうかは明確ではないが、おそらく彼女が借家を手配した時、間違いなく、心の中には兄のこともあったはずである。

彼女と夫が、5 年の間でブルックリンから出たのは、それが初めてだった。そして、彼が理事会と話し合うために戻るといふ騒ぎがなければ、1867 年のヨーロッパへの旅行以来、初めての本当の休暇であったかもしれない。彼が考えていたように、彼がブルックリンに滞在しているような要因は、ほとんど無かった。彼の指図事項は全て、ずっと前に準備されており、彼が言ったように、仕事の内容は全く普通の作業であった。実際に、主要な重要事項を決定することは、何もなかった。実際に、二人がとても長い間待ち望んでいた夏が、まさに始まろうとしていた。その頃には、彼が回復しつつあることは、二人とも確信していた。橋梁を建設するだけであり、マーティンとファリントンの残念な仲たがいを除き、工事は全く順調に進んでいた（どのような争いがあったかは判明していない。しかし、ファリントンが仕事を辞めるほど怒っており、ローブリングは大いに落胆した。その後、ファリントンがどのようになったのかは、記録されていない）。

ブルックリンへの突然の帰還は、ローブリングにとって身体的にも精神的にも、とても辛いものであったはずである。だが彼は、橋梁が誤った方向に向かうような深刻な状況にならないように、直ちにそれを決断した。しかし、彼が妻に書き取らせた私的な記録に書き残しているように、

その時点で理事会の機嫌を取るような提案は行わなかった。「私が健康だった時でも、それは行わなかったし、自分の独立性を保持することで、ようやく自分の勤めを果たすことができる」。たとえ、理事会が彼に対して腹を立て怒っていたとしても、その気持ちはお互い様であった。理事達の前に彼が姿を見せるという要請は、彼を犠牲にした単なる政治的な策略にすぎないと、彼は見ている。その秋には、重要な選挙が控えており、理事会には、選挙に意欲的な両方の党の理事がいた。橋梁が、次の州知事になる人物を決める可能性があった。州知事になるという話について、セス・ローがどれほど真剣に捉えていたかは、誰にも分からないことであった。だがスローカム（図-22.5⁸）に関しては、全く疑う余地はなかった。彼は、民主党指名の有力候補であった。スローカムにとって長く待っていた好機であり、彼の強力な後援者であるウィリアム・キングズレー（図-22.6）にとって、キングズ郡から外へ進出する準備が整った時期であった。

ローブリングは自分で言ったように、単に政治的な野心の目的に利用するために、理事会に引き出され、さらけ出されることを拒否した。彼は、十分な策士であった。彼は「私は政治家でなく、政治活動に命を捧げた人々に対して、いつも感じていた軽蔑する感情を、隠そうとしたことはなかった」と個人的に書いている。ある時、ローブリングは「自分が長年にわたって経験してきたような状況に、じっと我慢できる自尊心のある技術者は、この国にはいない」と述べている。彼は憤慨して腹の虫が治まらず、サン新聞の社説が無責任に彼を責めた時、忍耐力が切れてしまった。彼は、それに応える長い手紙の下書きを作成したが、それを送ることはなかった。エミリー・ローブリングの信書控え帳の一冊に、鉛筆による彼女の手書きの1通の写しがある。おそらく、その内容が、彼が多くを知りすぎているので遠くに離れていたと噂された話には、結局、一片の真実があったという唯一の根拠であろう。

ローブリングは、その手紙の中で「私は長年にわたって、理事会の“120人もの多くの政治家”に対処しなければならなかった」と述べている。しかしその時、彼が特に憤慨したことは、ローブリングが自ら理事会の面前に出席するように、「高潔なスローカム」が理事達の中で要請していることと、「高潔なスローカム」が「更に高潔なキングズレー」によって後援されていることであった。

ローブリングは「これが同じスローカム将軍である。彼は、私をあらゆる理事会から遠ざけるという要請に加担している。なぜならば、数百万ドルをスローカムの袖にいれるというキングズレー氏の提案した裏操作に、私の存在が邪魔になるかもしれないからである。なお、その数百万ドルは、いまだに彼らの予定額に達していない」と書いている。「我慢の限界に達した」ローブ



図-22.5 ヘンリーW. スローカム
(1827-1894)

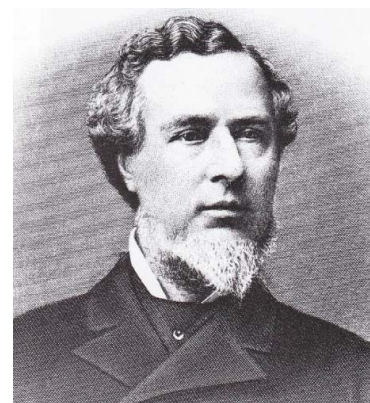


図-22.6 ウィリアム・キングズレー
(1833-1885)

出典：ニューヨーク市博物館

⁸ https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Henry_Warner_Slocum_-_Brady-Handy_restored.jpg (参照 2016-04-16)

ングは、総括責任者ウィリアム・キングズレーには、自分ではやってもいない仕事—実際はローブリングが行った仕事—に対して、17万5千ドルが支払われていること、そして何年も前に、会議室で立ち上がって、キングズレー氏の貢献に対して「彼と同じような著名な男性に、補償すべき金額を指定できる人物はいない」と強く主張していた人物こそが、ヘンリー・スローカムであったと断言している。

別の備忘録では、キングズレーも花崗岩の契約を受注するために参加していたが、ツィード・リングの崩壊がそれに終止符を打ったと、ローブリングは暴露している。キングズレーが、どこの花崗岩採石場の関係者であったかは、その備忘録には書かれていない。

そのように、技師長ローブリングは、何が行われていたかを認識していた。彼が技師長という立場でなければ、別の手紙、キャンベル会計監査官への手紙で、状況が更にひどいことを述べたかもしれない。(すなわち「いつも私には、理事会の中に辛らつな敵対者がいる理由として、どのような略奪計画でも、私が邪魔になっているとしか考えられない」と述べたかもしれない)。しかし、これまでローブリングはずっと黙っていた。

キャンベルへの手紙でのローブリングの記述は、更に「私は、理事達に何度も何度も尋問されました。理事達は、私と顔を突き合わせて自らが気づき、私が生き生きとしており、彼らが思っていたようなくだらない馬鹿者ではないと認識した時、橋梁に関してどんな形であれ、質問するようなことは全くなく、意見を述べることもほとんどありませんでした」と書いている。

7月の末頃、セス・ローは、ローブリングがブルックリンに来なければ、その時には、ブルックリン市長の自分がニューポートに出かけて、自分で確かめることにした。ローは、名高い技師長に、一目置くような理事ではなかった。

後に行われたローとローブリングの説明だけで、ローの慌ただしい訪問と対面に関して、様々な事が推測できる。新聞は簡単に、ブルックリン市長がしばらく市外へ出ているとだけ伝えている。

ローは船で到着して、ワシントン通を馬車で下り、どうやら直接ローブリングの部屋に案内されたようである。無駄な会話は、ほとんどなかった。ローは、ローブリングに対し「貴方にとって職を辞する時機であり、そうすることが本当に立派な対応であろう。・・・橋梁を建設した貴方の事を、歴史は決して忘れることはないだろう。・・・顧問技術者として残ることもでき、給料は据え置く予定である。C・C・マーティンを、技師長にする予定である」と告げた。

ローブリングは、そのような申し入れをきっぱりと拒否した。彼は、ローや他の人達が、私を辞めさせたいのであれば、遠慮せずに私を射殺する必要があると発言した。彼は、自らの意志で

辞めるつもりはなく、それが彼の最終結論であった。ローは、ローリングが頑強に言い張るのであれば、我々は射殺することになるであろうと言いつ返した。ローリングは、その理由を知りたかった。ローは説明をしようとしたが、面談についてのローリングの備忘録によると、若い市長の根拠は、とても脆弱で子供じみており、最終的には議論するのを諦めて「ローリングさん、貴方を辞めさせることが、私の喜びなのです」と発言したようである。その後、ローはその家から引き揚げて、24 時間も経たないうちに、ブルックリンに戻った。

それから数日後、エミリーとワシントン・ローリングには、更に別の衝撃的なことが起きた。8 月 8 日、G・K・ウォーレンが急に重症疾患になり、ニューポートの自宅で 52 歳の若さで亡くなった。ファイブ・フォックスにおける彼の不名誉な免責を調査するよう指示された軍事裁判所は、この時までには裁定に達していた。それは、ウォーレンの潔白を十分に証明し、称賛するだけでなく、彼が受けた待遇についても、重大な疑念を投げかけるものであった。しかし、彼とその家族にとって悲劇的なことに、裁判所の調査結果は、その後 3 ヶ月の間、公表されなかったようである。彼は、自分の潔白が証明されるまで、生きられなかった。

8 月 17 日の午後、ロー市長は、ブルックリンの各々の理事宛に、22 日火曜日に理事会を開催するという書簡を送付した。その書簡には「事業の重要案件を検討するので、都合をつけて出席頂きたい」と書かれてあった。すぐに、ブルックリン市庁舎の記者達は、これが何を意味するのかを知ろうとしたが、ローは、事前に言うべきことは何もないと答えた。しかしながら会議の数日前に、確かな筋から、ローが技師長解任の動議を計画していると伝えられた。

理事会は、午後 3 時ちょうどに予定通りに開催された。1 人の記者は「ヘンリー・マーフィーは、ブルックリンの若々しく元気なロー市長が提案していることを、熱心に進める気があるとは、とても見えなかった。・・・また、理事会の中でも尊敬されているジェームズ・S・T・ストラナハン氏も同様であり、・・・愛想がよくて商売人のようなニューヨーク市長のグレイスと同じように、情報を強く望んでいるように見えた」と記述している。

ローは、短い演説を行った。「私は確信しています。ブルックリン橋の工事管理については、あらゆる面で弱点があります。構造物の技術面—最も重要な部分—が、病人に握られていることです」と述べ、このことがどのような深刻な障害となっているかを話し続け、自分がニューポートに出向き、情理を尽くして説いたが、うまく行かなかった経緯を述べた。工事の完成を促進するために、ローリングにきわめて公明正大な提案をしたが、彼は同意しなかった。それゆえに、行動を起こす必要があると告げた。それでローは「その問題に関して、他の 2 人の職権を有する理事（ニューヨークの市長と会計監査官）と内輪の会議を開いた。そして 3 人の意見は、“ローリング氏が不本意であっても、交替させるべきである”という意見に達した」と説明した。ローは「それゆえ私は、ある決議を用意した」と述べ、直ちに次のようなことを提案した。

【事由】この橋の技師長である W・A・ローブリング氏が、長年にわたり、そして依然として、肢体不自由者である。

【事由】本理事会では、活動的な指揮を行うべき職務における技師長の不在が、必然的に工事の多くの面で遅れの原因となっていると判断した。

【決議】それゆえに本理事会では、ここにローブリング氏を顧問技術者に指名し、現在の第一アシスタント技術者である C・C・マーティン氏をニューヨーク&ブルックリン橋梁の技師長に指名する。

【決議】また、このような対応に関して、本理事会では、ローブリング氏から提供されたこれまでの貢献に対して、最大限の心からの謝意を表すとともに、この時期になって、このような変更が必要になったことに対して、遺憾の意を表明する。

ウィリアム・グレイス市長は、立ち上がり、ロー市長の決議に「大賛成である」と発言した。「この事業の進捗を邪魔するものが何もないように見守るなかで、他のあらゆる懸念事項を除外しておくことは、我々の責務である」。橋梁を建設し、その費用を負担している両市の選挙で選ばれた首長は、ワシントン・ローブリングを辞めさせる時期がきたと判断していた。

だが、その時に、ブルックリンの会計監査官であるルートヴィヒ・ゼムラーという新しく理事になった人物が、発言を求めた。彼は「私も工事は進めるべきだと考えています。しかし、ローブリング氏が、その仕事の最大限の便益をまさに挙げようとしているこの時期になって、その職責から彼を排除することは、彼を適切に活用していないと思います。どんな形であれ、橋梁を遅らせた責任が彼にある場合には、辞任させることに賛成しますが、そのような行為の根拠となる容疑の影は、見当たりません。実際、ローブリング氏は、橋梁建設の推進に向けて多くのことを実施してきました。彼の 13 年間の貢献の後で、彼に対する即決での決断は、やめようではありませんか。どなたかが私に、技術者が材料を使わずに橋梁を建設する方法を教えて頂けるのであれば、幸いに存じます。ローブリング氏への材料供給が適切に行われなかったことで、彼が他の人々の過失の犠牲となっています」と述べた。

これまでに出席した数回の理事会で、ほとんど発言をしたことがなかったゼムラーが、大変熱意をこめて発言し、ストラナハンはそれを大いに称賛した。ストラナハンは、いつもの壁を背にしたソファの席から立ち上がり、参加者に向かって、ある人が後に語ったように「葬式での語り手のような仕草と語り口」で演説を始めた。

ストラナハン「このような時に、年配のローブリングと若いローブリングの優れた能力を、私は思い出さざるを得ません。その能力が、我々に世界で最も素晴らしい橋梁を与えてくれたことを考えると、技師長のためにすべきことは、まだ何かがあると、私は感じざるを得ません。確かに、彼の健康は私たちが望むほどしっかりした状況ではありませんが、これまで何年間も、彼

一人だけが備えている工事の綿密な知識によって、その貢献が不可欠であった何年もの間、順調に進んで来ています。古くからの理事の方々には、私の発言の事実を理解して頂けるはずですが、この問題を別の会合で取り扱うのであれば、私の個人的な都合で恐縮ですが、次回の定例会議でそれを取り上げるよう強くお願いしたい。私は、この会議に出席するために 180 マイル (290km) も旅してきました。そして明日、家族の元に戻るため 180 マイル (290km) も旅をしなければなりません」と発言した。

ストラナハンは、夏のある時期をいつも過ごしているサラトガからブルックリンに戻って来ており、いつものやり方で時間稼ぎをして、どうすべきか心づもりができていない理事達の中での「判断の熟成」を当てにしていた。

その後、その問題は 9 月 11 日まで延期することが提案され、その動議は可決された。

ブルックリン側理事の全員が、日の暮れる時間まで話し合いを続け、その後数日間、実質的に川の両側のあらゆる新聞が、どちらか一方の肩を持つようになった。ニューヨークのトリビューン新聞は、橋梁が「最初から汚染」されていたとして、その責任を負う関係者として、マーフィー、キングズレー、ストラナハンとローブリングを関連づけて報道した。その新聞は「数年前に彼ら全員に年金を与えて退職させていれば、状況ははるかに良くなっていたであろう。・・・今こそ、素早い決断と力強い行動を求められる時である」と報道した。

スター新聞は「明らかに、新しい技師長を向かえる時期である。・・・ローブリング氏が橋梁リングの手先にならずに、自らの責務を果たしていれば、両市に対して数百万ドルを節約した可能性もあり、彼の熱意は、無駄にはならなかったかもしれない」と報道した。

ニューヨークのイブニング・ポスト新聞は「ロー市長の決議は、もう少しで手遅れになるところであった」と述べた。デイリー・グラフィック新聞は「吊橋建設に関するローブリングの特別な見識は、工事を進める上で、もはや必須ではなくなっている。橋梁工事は、誰かが間違っただけで計画を変更できないほど、はるかに進んでおり、彼を留まらせておく本来の理由はない」と論じている。デイリー・グラフィックの論説者は「1 人の人物が当初からこのような構造物を指揮してきたということは、現在ローブリング氏がこの橋梁を遅らせているように、完成を遅らす権利を彼に与えているわけではない」と結論付けている。

アイロン・エイジ新聞は、ロー市長の行動で唯一の間違ったことは、ローブリングを C・C・マーティンに置き替えるとの考えであったと、論評している。「そのような昏睡状態の技術者集団に、新しい生命を注入する場合には、外部から招聘すべきであり、それを内部で行うことは、残った工事履行には何ら影響を与えられない。工事を完成させるために、素晴らしい、あるいは特別な工学的才能でさえ、必要ではない。だが、必要とするものは、高い執行能力と、人格面でも大きな力を持ち、あらゆる将来的な政治面での立身出世に対して、全く依存しないような人物である」

ニューポートのデーリー・ニューズ新聞でさえ、その状況を報告せねばならなかった。その小規模な新聞は、8月24日の朝刊に「ニューヨークのグレイス市長とブルックリンのロー市長は、有名なイースト川橋梁の完成を待ち疲れてしまった。これまで、両都市間を連結する巨大な橋梁に巨費を投じており、その完成を妨げているような遅れが、これ以上起きないように、何とか阻止すべき時期にきている」という短い記事を掲載した。

トレントンのデイリー・ステイト・ガゼット新聞と、ブルックリンのイーグル新聞だけは、直ちに、怒りを表して、ローブリングの弁護に立ち上がった。デイリー・ステイト・ガゼット新聞は「彼の潔白な完全性と高い廉恥心は、疑う余地がなく、技術者としてのものすごい技術力は確固たるものであり、この工事への参画に、自らの健康の犠牲にしてまで傾倒している」と論評している。

当然のことながら、ブルックリンのイーグル新聞はもっと発言する必要があった。トーマス・キンセラは、二段組論説で「ロー市長は、自らが理事会で報告したように、ローブリングが顧問技術者を引き受けないと明確に発言しているにもかかわらず、ローブリングを顧問技術者に指名する提案を、どうして発表できたのか？ また、そのような変更で、どのような現実的な効果を得られるのか？・・・マーティン氏がこれまで何年間も、工事の実質面での管理的職務を行ってきたことが事実であるとはいえ、この時点で、マーティン氏自身の存在が、新しい人材といえるようなものなのか？ 彼が、必然的な帰結でないとするれば、他に誰がいるのか？」と疑問を投げかけている。

ローブリングの適格性に関しては、論点にさえならないと、キンセラが主張した。工事に対する彼のこれまでの貢献は、非常に大きなものであった。工事のどんな部分でも、技術者の責任に帰すべき失敗は、一件もなかった。さらに、彼という人間の品位を落し、彼の大成功のまさしく直前に、彼が受けて当然の栄誉を否定することは、下劣なことである。

なお、ローブリングの問題について、理事会で数人が強硬に個人的に述べた意見を除けば、大方の意見は、ブルックリンで報道されていることに集約されていた。数人の理事は、ローブリング個人として、その仕事への強烈な関心と、その完成をきちんと見届けたいという願望でのみ、この数年間を生き続けていることを、知るべきであると主張していた。その意味は、彼を解任する議決が、死刑宣告にも等しいということであった。

もちろん非常に重要な疑問は、そのようなキンセラの意見が、ウィリアム・キングズレーの意見であるかどうかであった。数年前であれば、その通りであったが、その時は違っていた。なぜなら、大きな影響力を持つようになった編集者は、次第に干渉を受けなくなっていたからである。少し前に、キンセラは、一部の経営者の論説問題に対する干渉が多すぎると感じたとき、辞職して対抗する新聞を始めることをほのめかした。それ以来、かなり多くことを彼自身で決定するように任せられていた。

ローブリングを支持するもう一つの論拠は、もちろん、橋梁自体の建設が依然として実際に進捗していることであった。この進捗状況については、ヘンリー・マーフィーが、両市長宛の正式な報告書で提示し続けていた。1 週間に、114 本の間弦材、72 本の斜張控え策、60 本の鉛直材、21 本の間弦材、21 本の架構トラス材、16 本の間弦材、12 本の下弦材、2 本の上部支持材が架設されていた。ブルックリン側取り付け道路の端部では、鉄製高架橋と駅舎の基礎工事が始まっていた。

しかし、ローブリングの精神面と身体的な健康状態に関する疑問は、解消されることはなかった。どちらかと言えば、その話題についての噂と当て付けは、以前にもまして有り余るほどであった。3 人のとても著名な長年の理事、マーフィーとストラナハン、キングズレーは、自分達がローブリングの精神状態を保証できると言ったが、彼らの言葉では、もはや物足りないだけでなく、若い理事の間ではすっかり疑われていた。自らローブリングに会い、彼と話をした若手理事達の唯一の人物がサス・ローであり、どちらにしても、彼はローブリングの状態について何ら論評しなかった。

8 月末頃、ルートヴィヒ・ゼムラー会計監査官は、ニューポートのワシントン・ローブリング夫人から、次のような手紙を受け取った。

前回の理事会における夫ローブリングに対する貴方の寛容な弁護に対して、私の心からの感謝を伝えるために、失礼を顧みず手紙を送ります。私達は、貴方が、両市の市長とニューヨーク市の会計監査官に賛成して行動されていると理解していたので、貴方の発言は、私達には非常にうれしい驚きでした。夫ローブリングは、私がブルックリンに出向き、貴方にお会いして夫の 2, 3 の伝言を申し上げるように、とても切望しています。貴方の事務所で、いつかの午前中に私とお会い頂くことは可能でしょうか・・・？ 私は、貴方が時間を取って頂けるのであれば、どのような日でもブルックリンに出向き、貴方の都合に合わせて、御自宅あるいは事務所にお伺いします・・・。

貴方は、夫ローブリングにとって見知らぬ方であり、発言して頂いた全てのことに、重ねて感謝致します。理事会の中には、夫をよく知って頂き、これまで 10 年間で、夫に対して行われた多くの非難の中でも、いつも夫の味方となって頂いた数人の古くからの友人の理事はおられますが、彼に全く会ったことのない方からの、そのような思いやりや親切を期待することは、これまでありませんでした。

9 月 5 日火曜日、理事会での投票の一週間前、ゼムラー会計監査官は、ローブリングに会って自分自身で判断するために、その晩にニューポートに向かうことを、突然発表した。

ゼムラーは「彼を審理する前に、誰も有罪判決を下すべきではありません。私は、ローブリング氏を解任させる企てに対し、ある程度まで彼を守ると約束しているのです。彼と個人的な面識を作り、私が彼にどのような印象を持つのかを確かめてみたいと考えています。この問題に関する例の発言から、彼が身体的に苦しんでいるだけでなく、精神的な能力も損なっているような印象が広まっているようです。もちろん、これが本当ならば、彼の計画に頼ることはできないし、調査が行われるまで工事は延期する必要があります。しかし医者から、彼の知性がまったく正常であることを聞いています。私は、本日かつてないほどに、価値ある人物を解任し、自らを弁護する機会を与えないままにしておく大いなる不当性を、更に確信しています。彼が橋梁事務所に出勤せずに、その責務が果たせなかったという考えは、不合理です」と述べた。

ゼムラーは「スエズ運河が建設されている間、デ・レセップスはパリに滞在していました。では、なぜローブリングが、橋梁から数ブロック離れた家に残っていることが、それほど不合理なのでしょう。・・・この件に関して、私の気持ちの中には、感傷的なものは何ともありません。問題は、公平性の一点だけです」と述べた。ゼムラーは、木曜日の朝に事務所に戻るつもりであると、記者に告げた。

突然、ゼムラーは、とても重要な人物となった。そして、彼がどのような報告を持ち帰るかに、大きな注目が集まった。その時点での状況は、ローブリングへの反対が少なくとも確実に 4 票、賛成が 4 票であった。ロー市長、グレイス市長、キャンベル（ニューヨーク会計監査官）、A・C・バーンズは、ローブリングを解任することを明らかに確約していた。一方、マーフィー、ストラナハン、マーシャル、ジョン・T・アグニューが反対の投票を行うと見られていた。しかし、残りの理事達は未決定か、あるいは未決定のように見えた。それゆえ、若手の理事達の間では、少なくともゼムラーの評価が決定要因になる可能性があった。

しかし、その時期には、ウィリアム・キングズレーとスローカム将軍が、どちらに投票するかとても興味深いことでもあった。なぜなら、スローカムは、州知事選挙における民主党指名での最有力候補であり、その党大会がわずか 2 週間後に迫っていたから確実であった。表面上は、二人とも当然マーフィーに同調し、技師長の後でしっかり支えるように思われていた。しかし、スローカムは、かなり多くの機会に、それに関して少なからず大衆に誇示しながらローブリングを攻撃してきた。また、旧い体制側に賛成し、ローやグレイスのようによく知られた改革の擁護者に反対する投票、すなわち、橋梁のさらなる遅延やさらなる出費（大掛かりな汚職や横領を意味するような出費）となる可能性のある体制への投票は、この特定の時期に真剣に取り組む候補者にとって、とても愚かな策略であり、後になって有権者に対して説明することがとても難しいことであった。それでも、スローカムはキングズレーの手下であり、そのことは、広く世間一般に信じられていた。キングズレーには力があり、決めるのはキングズレーであった。キングズレーは、先が見通せる人物であった。

ほぼこの頃に書かれたペイン宛の書簡で、ローブリングは「技師長としての自分の立場が、キ

ンズレーの投票によって決まるのであれば、その時にはすぐに橋梁から手を引くつもりであると述べている。

木曜日の朝、言葉通りに、ルートヴィヒ・ゼムラーは市庁舎の自分の机にいた。そこはロー市長の執務室から、まさに数箇所のドアを隔てた場所であった。記者が呼ばれて中にはいり、インタビューが始まった。

ゼムラーは「これまで全く面識が無かったローブリングにとっても優しく迎えられ、2 人の間で充実した率直な話し合いができた。・・・苛酷な神経性の疾患に苦しんでいる技術者であることは分かったが、その知性は全く明確で力強いものであった。・・・彼の知性がずっと損なわれていた場合、彼の失った知性を私が持っているならば、私は自分が幸せな男と考えるかもしれない。彼は、明快さをもって私に語りかけ、驚くばかりの記憶力を示していた」と発言した。

ゼムラーは「ローブリングが、彼を更迭するという提案について、どんな発言をしたのか」という質問を受けた。

ゼムラーは「彼は、いかなる事情があっても、技師長以外の職責は引き受けないと言った」と答え、ローブリングが言ったとおりに『彼等が私を更迭したければ、彼らに絶対にそれを実行させてください。彼等は、私が他のどのような職責も引き受けるつもりがないことを、認識しています。どうして彼らは、自分達がもはや私を必要としていないと発言しないのでしょうか。そうすることが、単刀直入な方法ではないのでしょうか』と伝えた。

「反対勢力を刺激した誘因について、彼の見解を尋ねたのでしょうか？」

「彼に対して敵意のある感情が存在することについて、考えるような要因があるかどうかを尋ねました。彼は、その点については何も言いたくないと、言っていました」

ゼムラーは「現時点で、我々を岸の近くまで連れてきてくれた御者を排除することは、恥ずべきことであると私は思っています。ロー市長からの提案された決議が採択され、マーティン氏が技師長の職を引き受けなかったとしましょうか？（ローブリングの部下の誰もが、そのような依頼を受けても、その職責を引き受けることはないであろうと、既にこの時点で一般には言われていたが、公共機関の立場の誰かが、公式にそのような発言をしたのはこれが初めてであった）。ペイン氏に依頼するとしましょうか？ 彼が引き受けることはないでしょう。そうすると、我々には、別の人物が必要となります。それは、工事の更なる遅れを引き起こします・・・その人物が、工事に余計な手出しを始め、橋梁の完成を 10 年間遅らせる可能性もあります」と続けた。

続いて、イーグル新聞の記者が「ロー市長のニューポートへの慌ただしい訪問の際に、ローブ

リング氏とロー市長との間で交わされたことについて、ローリング氏は何か発言したのでしょうか」と尋ねた。ゼムラーは「ローリング氏は、ロー市長との対談の内容を、確かに引用しました。ですが私は、ローリング氏の発言については、公表すべきではないと考えています」と述べた。

実際には、理事達が投票を行うために集まる次の月曜日の 9 月 11 日まで、ほんの僅かな事も公表されることはなかったようである。

しかし、ゼムラーの帰還と理事会の重要な会議の間に、ニューポートではローリングに更にもう一人の訪問客があった。それは、ニューヨークのワールド新聞の記者で、うまいことを言って何とか家の中へ入り込み、他のいかなる新聞記者も 10 年間できなかったローリングへの取材を何とか行ってしまった。取材での約束は、直接の引用には使用しないということであった。ローリングは明らかにその記者を信頼し、対談の中で、州知事の立候補予定者が溢れている理事会について、若干の痛烈な批評をした。記者は、帰る際の玄関口でエミリー・ローリングに、聞いたことは 1 行も印刷することはないと、再び約束した。しかし、その記者は約束を守らず、その記事が発表された時、ブルックリンではローリングの主張を推進するようなことは、全く行われなかった。理事会に所属するローリングの忠実な支援者達は、ローリングが自分自身に、これ以上ない最悪の一撃を加えてしまったと感じていた。

エミリーは、起こってしまったことに打ち砕かれ、自分の責任を痛感し、ウィリアム・マーシャル宛てに謝罪の長い手紙を書いた。マーシャルは、J・ロイド・ヘーグとの契約に反対投票をした人物で、政治家以外で長年理事を務めている数少ない人物の一人であった。その時の彼女は、あまりにも絶望でいっぱいであった。彼女は「私の夫は、とても分別があり、技術者としての才能は確かなものですが、多くの政治的な利権が関与するような場所での仕事には、確かに向いていません。・・・彼には、政治的な利権のために、何かをするような能力はありません。・・・私は、貴方に努力して頂いた全てのことに、深く感謝しております。また、橋梁の論争に終止符が打たれる時には、自分達に対しても、大いに失望しないようにしようと思っています。夫ローリングが最初に病気に罹って以来、長い厳しい闘いがありました。そして、今回の記者の訪問があらゆることを変えてしまうのであれば、私の全ての対応が管理できず、変更できなかったことは、神の手にそれが委ねられていたと理解します」と述べている。

出席者は、全理事のうちヨーロッパにいる 3 人（ジョン・G・ディビス、ヘンリー・クラウセン、H・K・サーバー）を除いて 17 名であった。いつものように、ヘンリー・マーフィーが理事長の席に座り、彼の前に半円形の形で、グレイスとローの両市長、キャンベルとゼムラーの両会計監査官、スローカム将軍、A・C・バーンズ、キングズレー、ストラナハン、アグニュー、J・アドリアンス・ブッシュ、トーマス・C・クラーク、ジュニア・ウィリアム・マーシャル、チャールズ・マクドナルド、ジェンキンズ・バン・シャイック、オールデン・S・スワン、そして秘書の

オットー・ヴィッテが並んで座った。6名の新聞社の代表の出席も許可されていた。

最初の 10 分間は慣例的な議事が進められた。前回会議の議事録が読み上げられ、C・C・マーティンが橋梁の両端部で建設中の 2 箇所の駅舎の遅れに関して若干の説明を行った。また、エッジ・ムーア製鉄会社からの納入されるべき鋼材の数百トンが、依然として残っていると報告された。ロー市長は、理事会が急いでいることをその会社に伝えるように、理事長に要請した。それに対して大きな笑いがあった。

その後、C・C・マーティンが退室し、ドアが閉められた。そして、セス・ローが椅子から立ち上がって、とても落ち着いた口調で話し始めた。

「会議での他の案件がなければ、先月私が提案した決議の審議を、お願いしたい。また、審議にあたって、その際に私が述べたことに追加したいことは、全くありません。その時に申し上げたように、その決議は、既存の技術者配置が、私達の抱えている工事を実現するために最良であるかどうかの疑問に向き合って頂くように、理事会に提案したものです。理事会の大多数が、世間で言われていることの責任を取るつもりであれば、私がこの課題の問題点を提議したことで、私は自分の責任を果たしたと思うつもりです。また、大多数があのだ処法を決議するのであれば、自分の判断が正しかったことが認識できて、私以上に喜ぶものはいないでしょう」

「一方、私は、ローブリング大佐を顧問技術者に任命する提案の決議を発表しています。その提案は、この工事の迅速な完成を妨げるものは何も許さないことを、我々が市民の方々に保証する最高の策だと、私が心から信じているからです。その効果は、公社の従業員だけでなく、彼らと取引をしている全ての人々にすぐに表れるであろうと、私は思っています。それは、この時点から、たとえ過去の状況がどうであろうと、理事達が真剣であるという前提で理事達に対応せねばならないことを、彼らに承服させることになるでしょう。私が言っていることは、これまでに従業員達の意味で理事を非難していたという意味ではありません……。ローブリング氏を直接的にも、間接的にも非難しているこの提議に何かがあるという考えは、私自身は全面的に否定します。私は……」

ヘンリー・マーフィーが、発言に割り込んだ。「私の話を聞いて頂けませんか。私は、ここにローブリング大佐からの書簡を持っています。これは、あなたが意見を述べる前に、読むべきだったかもしれない。あらゆる件について、この質問に関して、そして……」

ローが言い返して「私の話が終わってれば、結構だと思いますが。お許しいただけるのであれば、言わせて頂きたい。私は、その技術者を直接的にも間接的にも非難するという提議で、何かがあるという考えは否定しています。それは、彼が名誉に恥じないように受け入れることができる提議であると信じて、私は申し上げました。それは、彼が受け入れるべきで提議だと、私は思っています。私が思っている以上に、その本質は情け深いものです。というのは、私の判断では、その提案によって、彼を間違った職責から開放し、この工事に関する本来の職責に就任させ

ることになるからです。また、そうすることで、我々は、彼が受けている批判を彼から取り除くことになります」

「私が述べるもう 1 件のことは、私が先週提示した決議について、マーティン氏の意向を確認せずに申し出たことです。あの質疑が、部下の意向を聞かずに自分で決定することができないというのであれば、私は決議を提案しない方がよいと思いました。私の知る限り、その提案がそこまで考えられたものであることに、彼は全く気づいていません。また彼は、全ての発言において、技師長の忠実な友人の役を、ずっと演じていたのです」

「しかし、本当の問題は、どちらの対応が、理事や人々のことを心配すると同程度に、その技術者を心配するかということではありません。今日の我々の行動によって、我々は次のように言うのです。『我々には、まだ 9 ヶ月あるのです。我々には、125 万ドルの支出とその利息を支払う責任があり、1 日あたり約 3000 ドルの経費を支出する責任があるのです。問題は、我々が、病気の人物、あるいは、活気のある人物すなわち我々が毎日接触できる人物のどちらを、選ぶかということです』。過去にどのようなことが行われたかは無関係で、過去の経緯よりも、私の配慮の方が更なる文句が出ないと、私は述べているのです」

出席していた記者の 1 人によると、ここでグレイス市長は、まるでロー市長がとても滑稽なことを言ったように、急に喜色満面となったようである。

ローは「私は、これだけは言わねばなりません。大多数の方々が、そのような状況を取り除くという責任を果たして頂ければ、職員の判断を正当化しながら、我々全員が望んでいる橋梁を完成させるという結果を徐々に達成しつつ、職員と共に働くという最高の喜びを、私に与えて頂けるでしょう」と続けた。

そう言って、セス・ローは着席した。そして、ヘンリー・マーフィーは、秘書のオットー・ヴィッテにローブリングの手紙を手渡し、オットーが大声でそれを読みあげた。

手紙は短いもので、その内容は既に知られていることが、かなり多かった。すなわち、顧問技術者としての職責は引き受けるつもりのないこと、彼が不在で活動的な指揮ができなくても橋梁の進捗を妨げることはなかったこと、そして、彼の個人的な希望として、投票は、簡単に彼を指揮する立場で残すか否かで実施して頂きたいことが書かれていた。

グレイス市長は、即座に立ち上がった。「前回の会議で、私はロー市長から提示された決議への支持を表明しました。そして、それ以降、私の考えを変えるような事情は見当たらないので、ここで、再度、支持を表明します」。

続いて、ウィリアム・マーシャルが発言した。これまでの理事会で、彼は、他の大部分の理事と同様に積極的に発言することはなかった。また、演説家として有名ではなかった。だから、部

屋の中の誰もが、彼が行った演説について、予め準備されたものとは思わなかった。

彼は次のように切り出した。「理事長、このような決議がここに提出されたことを、私は残念に思っています。私には、ローブリング氏が更迭されるような理由が見当たりません。私は、この橋梁が多くの人々によって、幾度も後退させられたことは認識していますが、ローブリング氏が橋梁を一日あるいは一時間でも後退させたことは、決してなかったと認識しています。皆さんがその職責に据えようとしているまさにその紳士は、橋梁が自分の上司である技術者によって後退させられていることは信じられないと発言するほど、とても尊敬される正直な人物です。さらに自分が知る限り、彼は、その技術者とアシスタント技術者達が、橋梁で間違いを犯したことはない」と発言しています」

ひき続いて、彼は、セス・ローの方を振り向き「貴方は、彼を更迭したい。つまり彼を追放したい。何のために？ どうして？ 橋梁建設家として、地球上には、彼に匹敵するような人物は、いません。私は、矛盾した言動には、公然と反対する！」と言った。

「ナイアガラには、2 箇所橋梁が架かっています。彼は、そのうちの大きい方の橋梁を架橋し、いまでも架かっており、完全に成功しています。私が言う『彼』とは、彼の父親と彼自身、つまり、この橋梁で犠牲になった父親のことです。オハイオ川には、2 箇所橋梁が架かっており、1 橋はローブリング氏によって架橋され、もう 1 橋は、自らの名前を恥じている人物によって架橋されました。そのホイーリングの橋梁は、川の中へ崩落し、シンシナティの別の橋梁は、それを架橋した人物の誉れとなっています。私はこれまで、彼が間違いをしたとか、橋梁を後退させたとか、犠牲となるべきであるとか、そのようなことは聞いたことがありません。個人としては、振り上げた拳を降ろして、自らの人格や能力を傷つけることなくここに突っ立っている人物への反対票を投じることで、私自身を許したいと思っています。今この瞬間に皆さんが、ケーソンを沈めていた時期を振り返って頂ければ、彼がほんの一瞬たりとも橋梁を後退させるようなことはなかったことに、気づいて頂けるでしょう」

再び、ブルックリンの市長に振り返り、今度は怒りながら「しかし、我々の友人であるロー氏はニューポートに出かけて、彼の辞任を要求しているのです！ どのような権限で？」と発言した。部屋が絶対的な沈黙につつまれた。「貴方は、それに関してどのような法律を持っているのですか？ 持っておられるのであれば、それを見せて頂きたい。私は、ニューヨークの会計監査官の事務室で会っている 3~4 人の理事が、どのような議会制の使用法で、この委員会の要請を代表するように主張するのかを、知りたいのです」。2 人の市長とキャンベル会計監査官は、その間ずっと微笑みながら、マーシャルをじっと見つめていた。

「貴方達は、罪のない男性を告発し、我々がここで検討している遅れと損失の責任を彼に取らせようとしていると、私は考えています。私がこの理事会を心得ているとすれば、ここには、貴方達が技師長の更迭を可能とする信義が多過ぎるということです。何らかの間違いが見つかった場合、どこに間違いがあるかという観点から始めるべきです。この 10 年間に理事会に欠陥があっ

たとすれば、私は個人的にはその責任を負う気があるが、こっそり出かけて、その責任を技師長の肩に載せるようなことはしたくありません。そのようなことは、私にとって卑劣で軽蔑に値することであり、そのようなことを行う気はありません」

彼が着席すると、再び長い沈黙が続いた。その後、秘書のヴィッテは、準備していた技師長を支持する短い文章を読み上げ、J・アドリアンス・ブッシュは、自分もローブリングを留任させるほうに投票すると発言した。ブッシュは「ローブリングの弁護を声に出して言う技術職員は、マーティンだけでなく、全員です。論点の核心は軌道計画の変更であり、それはローブリングが行ったことではなく、彼ら全員がそのことを認識しています。・・・その問題は、大罪や悪行で告訴された人の裁判に取り組むと時と同じように、厳粛に取り組むべきではないでしょうか。我々は、皆さんや私が、裁判官や公共機関の誰かの告訴を注視する際と同じような見方で、それを見るべきではないでしょうか。我々は、一方では大衆の騒ぎに縛られず、もう一方では個人的な思い入れにも縛られず、それを見つめるべきです」と述べた。

A・C・バーンズは「私は、ローブリング大佐を本心からとても賞賛しているが、ローブリングがあらゆる名声と現在の報酬のままで引退することになっても、傷つけられたと感じるべきではないと、私は考えています。・・・なぜでしょうか。ローブリング氏が普通の軍士官であれば、半給となり、特に仕事も無くなり、ずいぶん前に引退したはずです。そのことについては、何も考えていないのでしょうか。・・・どうしてローブリングが、ロー市長の決議、『私も同じように誠意と情け深い気持ちがあると確信している決議で、投票を行おうとしている私達誰もが活気づけられるような決議』を受け入れないのか、私にはどうしても理解できない」と発言した。

ルートヴィヒ・ゼムラーは、明らかに会議がローブリングの不利な方向に進んでいると判断し、投票を延期して一切合切を特別委員会に委託することを提議した。しかし、マーフィーとストラナハン、スローカムと同様、ここまで何も発言していなかったウィリアム・キングズレーは、どうやら何かを思案しており、ここがまさに投票を行うべき時であると結論を下した。

ロー市長がすぐに「私も同感である」と発言した。

意見を求められた他の数人は、スタナハンを含めてあっさりしていた。なお、スタナハンは、ローブリングがまだ必要であると、簡単にむしろ弱々しく発言した。そして、ローの決議に対して、発声による投票が行われ、次のような結果となった。

賛成ーグレイス市長、ロー市長、キャンベル会計監査官とヴァン・シャリック、クラーク、マクドナルド、バーンズ各氏。

反対ーゼムラー会計監査官とマーフィー、ブッシュ、ヴィッテ、マーシャル、ストラナハン、アグニュー、スワン、キングズレー、スローカム各氏。

票決は、賛成 7、反対 10 となり、決議は否決された。ローブリングは、ウィリアム・キングズレーとヘンリー・スローカムを含む 3 票差で勝った。しかし、彼ら 2 人、あるいは他の 2 人が、異なった投票をした場合には、ローブリングは更迭されるところであった。

翌日のいくつかの新聞見出しは、「技術者ローブリング留任」、「ローブリングに大多数」、「ローブリング引退せず」であった。

ロー市長は、記者に対して「私は、理事会の決定に全く満足している」と発言した。また、ローブリングを支援した理事の数人に対して「私は、最初から、ローブリングが勝つことを、秘かに望んでいた」と話した。セス・ローは、ルートヴィヒ・ゼムラーに「できれば私は、橋梁が、他のどのような技術者よりも、ローブリングの指揮の下で完成するのを見たい」と話した。ゼムラーは、ある取材の中でこの話を繰り返し、市長がより引き立って見えるように、明らかに配慮していた。また、彼は、ローブリングの不可解な疾患についての彼自身の個人的な診断、投票が始まる前には言わなかったことについて述べた。「実際のところ、私は、彼を苦しめている全ての原因が、彼に多くの人々と交わることができないようにする神経的な疾患にあると、信じている」